



Title	教材「かみなりさま談義」考(3)
Author(s)	佐野, 比呂己
Citation	国語論集, 11: 67-76
Issue Date	2014-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7478
Rights	

教材「かみなりさま談義」考(3)

研究の経緯

本稿は「教材「かみなりさま談義」考(1)」・「教材「かみなりさま談義」考(2)」に続くものである。「教材「かみなりさま談義」考」は、次のように構成されている。

- 一 教材「かみなりさま談義」
- 二 筆者・東条操
- 1 教科書 及び指圖書
- 2 東条操年譜
- 3 東条操への評価
- 4 東条操と文字
- 5 東条操の性格
- 6 東条操と柳田国男
- 7 東条操の方言観

以上(1)

三 原典『方言の研究』 【資料 教科書本文】

以上(2)
(1)(2)

佐野比呂己

四 原典と教科書の異同

本文の原典『方言の研究』と柳田教科書教材本文とを比較すると、表記の異同が多々見られる。また、教材化に際し削除している部分も見られる。左記にそれらを一覧できるように作成した異同表である。

異同のある箇所については、柳田教科書教材本文の該当部分をゴシック体にした。また、傍線を施し原典との異同を明らかにした。○数字は該当頁の行数を示す。

この異同表は、教科書の記述からだけでは理解しえない随筆「地図をいろいろ」の真意に迫る基礎資料となるものである。

<p>『方言の研究』(1) 瀧院 昭和二十四年(一九四五)十月 かみなりさま談義 かみなりさまにかけて、金の鈴と解く。心はぐるなる。光る。</p>	<p>『国語 高等学校一年上』東京書籍 昭和二十年版(一九五五)版 四 二頁 四 かみなりさま談義 東条操 かみなりさまにかけて、金の鈴と解く。心はぐる。鳴る。光る。江戸つ子に雷のきらいな</p>
---	--

江戸ッ子には雷の嫌な人が多いよつた。「かみなりは鳴る時はかり様をつげ」というが私もこのかみなりさまを、それも鳴らないう時たつてかみなりなと呼び捨てに上覺えはない。

俚言に因んだ隨筆といふ柄にない注文を引受けたのが不覺だつた。親切に近いのうまい材料が見つからない、種がないので今朝からムシヤクシヤしていた。梅雨珍しく晴れながらたまらなく蒸し暑。

午上 点、颯とかき曇ると紫電一閃、思いがけぬ霹靂だ、追つかけて沛然たる豪雨だ。「多々、鳴る、光る」が「光る、なる、落ちる」になる。この中ではを思いついたのが、この「かみなりさま」談義である。

江戸時代の有名な方言書の種類称呼には雷はでない。勿論雷の俚言はめだかやかたつむりの様、夥しい種類はないが、併し「かみなり」「一色」でもない。

東京語では、どうも「かみなりさま」ではないかと思う。これは伊董語かも知れないが、私

伊董語かも知れないが、私

なほ「かみなり」ではどうももつたない様な気がして、未だにかみなりさまである。これは「おてんとさま」「おつきさま」「おほしさま」と同格の扱いでやはりこれを神とあがめたものに違いない。雷を神といつた事などは事新しと説くまでもないが、すつと古

い事で万葉集にも見えている。伊香保谷でも雷の多い所であるが、東歌の中にも「伊香保谷にかみなりそね吾が上には故はなけども見らに因りてぞ」という歌が見えている。「かみなり」というのは雷神よりは雷龍をさしたものでらしい。いつ頃からある言葉か調べてはみないが、平安朝にあつた事は疑義を「かみなりのつぼ」と言つた事でもわかる。これはその

小庭に霹靂木があり、雷鳴の時、天皇がこの殿を御動座

②人が多いよつた。「かみなりは鳴る時はかりさまをつげ」というが、私もこのかみなりさまを、それも鳴らない時たつてかみなりなと呼び捨てに上覺えはない。

④ 俚言に因んだ隨筆といふ柄にない注文を引受けたのが不覺だつた。親切に近いのうまい材料が見つからない、種がないので下さからむしやくしやくしていた。つゆに珍しく晴れながらたまらなく蒸し暑。

⑦ 午上 点、颯とかき曇ると紫電一閃、思いがけぬ霹靂だ、追つかけて沛然たる豪雨だ。「多々、鳴る、光る」が「光る、なる、落ちる」になる。この中ではを思いついたのが、この「かみなりさま」談義である。

⑩ 江戸時代の有名な方言書の種類称呼には雷はでない。もちろん雷の俚言はめだかやかたつむりの様におびたらしい種類はないが、しかし「かみなり」「一色」でもない。

⑫ 東京語では、どうも「かみなりさま」ではないかと思う。これは伊董語かも知れないが、私

二三頁

①なほ「かみなり」ではどうももつたない様な気がして、未だにかみなりさまである。これは「おてんとさま」「おつきさま」「おほしさま」と同格の扱いでやはりこれを神とあがめたものに違いない。雷を神といつた事などは事新しと説くまでもないが、すつと古

い事で万葉集にも見えている。伊香保谷でも雷の多い所であるが、東歌の中にも「伊香保谷にかみなりそね吾が上には故はなけども見らに因りてぞ」という歌が見えている。

⑥ 「かみなり」というのは雷神よりは雷龍をさしたものでらしい。いつ頃からあるかは調べてはみないが、平安朝にあつた事は疑義を「かみなりのつぼ」と言つた事でもわかる。これはその

⑧ 霹靂を「かみなりのつぼ」といふ小庭に霹靂木があり、雷鳴の時、天皇がこの殿を御動座

があつたからだと伝えている。
又大雷の時には玉体を御護りする
ために「かんなりの陣」を引
いた事も見えている。

倭名鈔には神靈類として東公

が出て居り伊加豆知又は奈流加美とある。この「なるかみ」は万葉
集にも多く出て前にあげた「かみ」はこの「なるかみ」の略語
だとも説かれている。とにかく「かみなり」よりは古い。

さて、俚言に戻ると關東にはカミナリサマが広く分布している。

これに隣接している山梨の郡内ではオカミナリサン、オカシナリサ
ンと更にオを付ける方が普通の上である。オアントサマの類を考
えるところの方が順当だが關東一帯では雷はオを付けない。古語の
「なるかみ」は關東には余り発見されないが、群馬の利根、吾妻の
両郡の一部にナルカミサマ、ナリカミサマが行われている。併し、
日本を広く見渡すと西日本の中国、四国の大部、九州では天分、佐
賀にこのナルカミ系の方言が発見され、遠く離れて鹿児島県の徳の
島にナルカミガナシ、分ナシは縁に近い敬語が行われている。東
日本にはただ、極北の青森秋田の一部にナリカミという俚言が報告さ
れているだけである。即ちこのナルカミ系は全体西日本の中国、四
国に残って東日本に滅びた言葉である。

に ※(五)行也

- ①時に天皇がこの殿所に御座座
- ②があつたからだと伝えている。ま
- ③は大雷の時には玉体を守りす
- ④のために「かんなりの陣」を引
- ⑤いたとも見えている。
- ⑥倭名鈔には神靈類として東公

※(五)の傍注

一四頁

- ①が Outcome 伊加豆知又は奈流加美とある。この「なるかみ」は万葉集にも多く出ていて
- ②前にあげた「かみ」はこの「なるかみ」の略語だとも説かれている。とにかく「かみなり」よ
- ③りは古い。

- ④ さて、俚言にもオを付けた關東ではカミナリサマが広く分布している。これに隣接している山梨
- ⑤ の郡内ではオカミナリサン、オカシナリサンとオを付ける方が普通の上である。オアント
- ⑥ ントサマの類を考えるところの方が順当だが、關東一帯では雷はオを付けない。古語の「なる
- ⑦ かみ」は關東には余り発見されないが、群馬の利根、吾妻の両郡の一部にナルカミサマ、ナ
- ⑧ リカミサマが行われている。しかし、日本を広く見渡すと西日本の中国・四国の大部、九
- ⑨ 州では天分、佐賀にこのナルカミ系の方言が発見され、遠く離れて鹿児島県の徳の島にナルカ
- ⑩ ミガナシ、分ナシは縁に近い敬語が行われている。東日本にはただ、極北の青森・秋田の一
- ⑪ 部にナリカミという俚言が報告されているだけである。すなわちこのナルカミ系は全体西
- ⑫ 日本に滅びた言葉である。
- ⑬ 雷をカミという地方は現在ではきわめて稀である。熊本県の球磨郡ではカミ、カミサマとい
- ⑭ い、静岡のある地方でカミサンというところである。關東にはオカミとだけいう地方はない
- ⑮ が、オカミダチという俚言がかなり広い地域に行われている。
- ⑯ 中山信名の新羅陸国誌に

中山信名の新羅陸国誌に

カランダチ 雷ヲ云、神祭ノ謂ナリ、オカランダチサマナドト云フ、或ハカランダチト云ヒテ雷獸ノ称ナリト思ルモアリ、夕立上云ヘルモ雷ヲ發スル多クハ日夕ニアル故ナリ
補説として細註がある。

日本紀雜略卷三雷ヲカミトヨミ、伊勢物語ニ、神ナルサワギニ云タナドアルニ、雷ヲ神ト云コト明ナリ、サレバ雷ヲチ出テ鳴リハタメクサマヲ恐ミ、テカクハ云ナレハシ

このカランダチ系は關東、南奥州を中心としその隣接地方例へば、長野や岩手にも分布している俚言で千蕨草はカランダチという事が多く、神奈川、群馬、茨城では寧ろオカランダチサマ、カランダチサマという。福島県ではカランダチサマといふ地方もある。

カランダチのカンは神は違いないが夕チについてはまた定説はない。この俚言が雷と共に、雷雨そのものについても使用されるので、ユータチと關係して考へざるべきものと思われ、夕立はゆうたつという動詞の名詞形で夕方のよきに空が暗くなる事をいい、驟雨の時天地が晦冥となる事を夕チものとして解せられている。

埼玉や群馬、雷をユータチサマ、オユータチなどという事も併せて考へてよい。
同レ常陸國誌に

「シグレ」又雷ノ一称ナリ、時雨ノ義ニアラス、鹿島郡ノ辺ニテママコレヲ称ス、古語ナリ、万葉集卷第十ニ雜歌ノ内ニ霹靂之目香天之九月乃鐘礼乃落者應豆全采鳴云々ト云フ。
万葉の引歌に当たっていないようだが、霞ヶ浦沿岸の鹿島、香取、行方の諸郡にオシグレサマ、シグレサマ、オシグレレという俚言は今日も使っている。これも雷雨から出た俚言であらう。同じようなものに茨城県にはオフツカケサマという雷の俚言がある、吹きかけ雨

二五頁

① 「カランダチ」雷をいふ、神祭の謂なり、オカランダチサマなどいふが、あるはカランダチといふ雷獸の称なりと思ふるまあり、夕立といふも雷の發する多きは夕に於るゆゑなり。
②

④ 補説として細註がある。

⑤ 日本紀雜略卷三雷をカミトイフ、伊勢物語に、神鳴る聲と云々などあるにて、雷を神といふと明かになり、まはは雷のたけで鳴はたためまきをかしよかといふなるべし。

⑦ このカランダチ系は關東、南奥州を中心とし、その隣接地方、たとえば、長野や岩手にも分布している俚言で、千蕨草はカランダチといふことが多く、神奈川、群馬、茨城では寧ろオカランダチサマ、カランダチサマという。福島県ではカランダチサマといふ地方もある。

⑩ カランダチのカンは神は違いないが夕チについてはまた定説はない。この俚言が雷と共に、雷雨そのものについても使用されるので、ユータチと關係して考へざるべきものと思われ、夕立はゆうたつという動詞の名詞形で夕方のよきに空が暗くなる事をいい、驟雨の時天地が晦冥となる事を夕チものとして解せられている。

⑬ 埼玉や群馬、雷をユータチサマ、オユータチなどという事も併せて考へてよい。同レ常陸國誌に

「シグレ」また雷ノ一称なり、時雨ノ義にあらず、鹿島郡の辺にママコレヲ稱ス、古語なり、万葉集卷第十ニ雜歌の内「かみ礼の落の音の降ればかりがねもまた来鳴かす云々」といふ。

二六頁

① 「シグレ」また雷ノ一称なり、時雨ノ義にあらず、鹿島郡の辺にママコレヲ稱ス、古語なり、万葉集卷第十ニ雜歌の内「かみ礼の落の音の降ればかりがねもまた来鳴かす云々」といふ。

からの造語だと思われぬ。

「いかづち」という古語を使っている地方が未だあるかどうかは疑問だが、関東には西茨城からカウチという聲京が来ているが、これは再調査しないでは信用出来ない。どうも、いかづちでも死語となつたらしい。

以上は雷男神と扱れた古人の心理を伝えた言葉であるが、中国・四国などの各地には落雷する事を方言でアマルという。若しこれが、天振るの訛りとするなら、これも雷神といふ考を方に帰する俚言である。

雷を表す俚言にはやはり神の觀念をもとにしたから、雷鳴の轟音を以てこれを字した二類がある。関東地方の兒童語のゴロゴロサマなどはこれである。近畿の一部や滝井県にハタガミ、ハカガメという俚言がある。これは文字語にもつた「はたは神」の訛語、その

「はたは」は「はたはた」の略形で擬音語であつた。この頃配本編「上頁」になつてから時々東京の魚屋で顔を出した「はたはた」は秋田の八郎潟などでとれる魚、雷鳴の時に海から上つて来るといふので、鰯とも鰯とも記される。アンドンロという俚言はいまもなま擬音語で地方によつて濁り淵なをもちが瀬戸内海沿岸地方、即ち中国の岡山・広島・四国の香川、愛媛などではアンドンロ、ドドログカミ、ドドログメは雷である。大分県でもドドロサマ、ドロンサマ、ドロガミサマといふ。日本海方面で見るとドドログカミ、伯耆ではドドロ、ドロサン、その外の鳥取県でアンドンロケ、石川県でアンドンガミといふ。東日本にも静岡のある地方でドドロロサン、群馬の利根にドドサマ、秋田の平鹿にアンドンサンといふ同様の俚言が散在している。漢語の雷を字首でライという地方も少くないが、関東ではライサマとやはりサマをつけて呼ぶ。栃木と茨城とで特に多く言うようであ

⑦造語と思われぬ。

⑧「いかづち」という古語を使っている地方が未だあるかどうかは疑問だが、関東には西茨城からカウチという聲京が来ているが、これは再調査しないでは信用出来ない。どうも、いかづちでも死語となつたらしい。

⑩以上は雷を神と扱れた古人の心理を伝えた言葉であるが、中国・四国などの各地には落雷する事を方言でアマルという。もしこれが、天振るのなまりとするなら、これも雷神といふ考を方に帰する俚言である。 ※(後頁で)

⑭雷を表す俚言にはやはり神の觀念をもとにしたから、雷鳴の轟音を以てこれを字した二類がある。関東地方の兒童語のゴロゴロサマなどはこれである。近畿の一部や滝井県にハタガミ、ハカガメという俚言がある。これは文字語にもつた「はたは神」の訛語、その

「上頁」

①「はたはた」は「はたはた」の略形で擬音語であつた。時々東京の魚屋にも顔を出した「はたはた」は秋田の八郎潟などでとれる魚、雷鳴の時に海から上つてくるといふので、鰯とも鰯とも記される。

④アンドンロという俚言はいまもなま擬音語で地方によつて濁り淵なをもちが瀬戸内海沿岸地方、すなわち中国の岡山・広島・四国の香川・愛媛などではアンドンロ、ドドログカミ、ドドログメは雷である。大分県でもドドロサマ、ドロンサマ、ドロガミサマといふ。

⑦日本海方面で見るとドドログカミ、伯耆ではドドロ、ドロサン、そのほかの鳥取県でアンドンロケ、石川県でアンドンガミといふ。東日本にも静岡のある地方でドドロロサン、群馬の利根にドドサマ、秋田の平鹿にアンドンサンといふ同様の俚言が散在している。

⑩漢語の雷を字首でライという地方も少くないが、関東ではライサマとサマをつけて呼ぶ。

る。埼玉と群馬のある地方では、ライデンサマともいう、雷電社とい
 いて雷神を祭った地方もある。ライサマは訛言ではタイサマ、デー
 サマともいう。熊本には関東に似た言葉が往々あるが雷もライと
 もタイともいう。

「いかづち」「なまのかみ」「かみなり」「はたかみ」は皆文字に
 現われた言葉で、これに勢力の消長があって現在の俚言の分布とな
 ったものであつた。「ちぢるがみ」も文獻の上にあらずに思われ
 るが書簡にしてまた「これを知らない」。

「どうやら雲がきれて青空も出て来た、梅雨もわけてあけるであつた」

トマトの畑から葉がボタボタ落ちる

① 栃木と茨城とで特々多いようである。埼玉と群馬のある地方では、ライデンサマとい
 う。雷電社といつて雷神を祭った地方もある。ライサマは訛言ではタイサマ、デー
 サマともいう。熊本には関東に似た言葉が往々あるが雷もライともタイともい
 う。

② 「いかづち」「なまのかみ」「かみなり」「はたかみ」は皆文字に現われたとほく、これに
 ③ 勢力の消長があつて現在の俚言の分布となつたものであつた。「ちぢるがみ」も文獻の上にあ
 らず書簡にしてまた「これを知らない」。

④ どうやら雲がきれて青空も出て来た、梅雨もわけてあけるであつた。

※記述せし

原典と教科書教材本文との異同を確認する。テキスト化に
 際しての疑問点、問題は、後に記す「語句・表現」の項で合
 わせて論じることとする。尚、(一)内は原典『方言の研究』
 の表記、【一】内は教科書教材本文の頁・行数をそれぞれ表す。

(一) 原典では漢字表記であつたにもかかわらず、教科書ではひ
 らがな表記となつてゐる。

- ・ きらい (嫌) 【二二①】
- ・ さまをつけ (様をつけ) 【二二②】
- ・ 呼びすて (呼び捨て) 【二二③】
- ・ ちなんだ (因んだ) 【二二④】
- ・ がらにない (柄がない) 【二二④】
- ・ けさ (今朝) 【二二⑤】
- ・ つゆ (梅雨) 【二二⑤】
- ・ もちろん (勿論) 【二二⑩】
- ・ ように (様に嫌) 【二二⑪】

- ・ おびただしい (夥しい) 【二三⑪】
- ・ しかし (併し) 【二三⑪】
- ・ しないが (知れないが) 【二三⑫】
- ・ もつたいないような (もつたいない様な) 【二三①】
- ・ いまだに (未だに) 【二三①】
- ・ ちがいない (違くない) 【二三③】
- ・ ことなどは (事などは) 【二三③】
- ・ こと新しく (事新しく) 【二三③】
- ・ 古いこと (古い事) 【二三④】
- ・ ゆゑは (故は) 【二三⑤】
- ・ よりてぞ (因りてぞ) 【二三⑤】
- ・ いつごろ (いつ頃) 【二三⑤】
- ・ ことば (言葉) 【二三⑥】
- ・ あつたことは (あつた事は) 【二三⑦】
- ・ いったことで (言つた事で) 【二三⑧】
- ・ また (又) 【二三⑫】

- ・お守りする(御護りする)【二三¹³】
- ・ひいたことも(引いた事も)【三三¹⁵】
- ・おり(居り)【二四¹】
- ・または(又は)【二四¹】
- ・もどると(戻ると)【二四⁴】
- ・さらに(更に)【二四⁵】
- ・あまり(余り)【二四⁷】
- ・しかし(併し)【二四⁸】
- ・見わたすと(見渡すと)【二四⁸】
- ・すなわち(即ち)【二四¹¹】
- ・だいたい(大体)【二四¹¹】
- ・ことば(言葉)【二四¹²】
- ・きわめて(極めて)【二四¹³】
- ・まれ(稀)【二四¹³】
- ・すでに(既に)【二四¹⁴】
- ・いう(云フ)【二五¹】
- ・いう(云フ)【二五¹】
- ・あるいは(或は)【二五¹】
- ・いひて(云ヒテ)【二五²】
- ・いへるも(云ヘルモ)【二五²】
- ・ゆゑ(故)【二五²】
- ・いふこと(云フコト)【二五⁶】
- ・いでて(出デテ)【二五⁶】
- ・いうなるべし(云フナルベシ)【二五⁶】
- ・たとえは(例えば)【二五⁸】
- ・こと(事)【二五⁹】
- ・むしろ(寧ろ)【二五⁹】
- ・ともに(共に)【二五¹¹】

- ・こと(事)【二五¹⁴】
- ・こと(事)【二五¹⁵】
- ・あわせて(併せて)【二五¹⁵】
- ・また(又)【二六¹】
- ・あたり(辺)【二六¹】
- ・かみとけの(霹靂之)【二六²】
- ・あたつて(当つて)【二六⁴】
- ・できない(出来ない)【二六⁹】
- ・ことば(言葉)【二六¹¹】
- ・こと(事)【二六¹²】
- ・もし(若し)【二六¹²】
- ・なまり(訛り)【二六¹²】
- ・もつて(以て)【二六¹⁴】
- ・上つてくる(上つて来る)【二七²】
- ・しるされる(記される)【二七³】
- ・すなわち(即ち)【二七⁵】
- ・そのほかの(その外の)【二七⁷】
- ・いう(言う)【二七¹¹】
- ・ことば(言葉)【二七¹³】
- ・ことば(言葉)【二七¹⁴】
- ・出てきた(出て来た)【二八¹】
- ・つゆ(梅雨)【二八¹】

(2) 原典での漢字表記が、教科書では別の漢字表記がなされて
いる

- ・お守りする(御護りする)【二三¹³】

(3) 原典での漢字表記が、教科書ではカタカナ表記がなされて

いる

・ サマに (様に) 【二四⑩】

(4) 原典ではひらがな表記であったにもかかわらず、教科書では漢字表記となっている。

・ ふる、鳴る、光る。(ふる、なる、光る。) 【二二①】

・ 明けるであろう。(あけるであろう。) 【二八①】

(5) 原典ではカタカナ表記であったものが教科書ではひらがな表記となっている。

・ むしやくしや (ムシヤクシヤ) 【二二⑤】

・ 雷をいふ、神発の謂なり、オカンダチサマなどといふ、あるいはカダチといひて雷獣の称なりと思へるもあり、夕立といへるも雷電の発する多くは日夕にあるゆゑなり。【二五①—③】

(雷ヲ云フ、神発ノ謂ナリ、オカンダチサマナドト云フ、或ハカダチト云ヒテ雷獣ノ称ナリト思ヘルモアリ、夕立ト云ヘルモ雷電ノ発スル多クハ日夕ニアル故ナリ)

・ 日本紀雄略巻に雷をカミと読み、伊勢物語に、神鳴る騒ぎに云々などあるにて、雷を神といふこと明らかなり、されば雷のたちいでて鳴りはたふくさまをかしこみてかくはいふなるべし。【二五⑤—⑦】

(日本紀雄略巻ニ雷ヲカミトヨミ、伊勢物語ニ、神ナルサワギニ云々ナドアルニ、テ、雷ヲ神ト云フコト明ナリ、サレバ雷ノタチ出デテ鳴リハタメクサマヲ恐ミ、テカクハ云フナルベシ)

・ また雷の一称なり、時雨の義にあらず、鹿島郡のあた

りにてままこれを称す、古語なり、万葉集第十三雜歌の内に「かみとけの光るみ空の長月のしぐれの降ればかりがねもいまだ来鳴かず云々」と見ゆ。【二六①—③】

・ 引き歌は (引歌ハ) 【二六④】

(又雷ノ一称ナリ、時雨ノ義ニアラズ、鹿島郡ノ辺ニテママコレヲ称ス、古語ナリ、万葉集第十三雜歌ノ内ニ霹靂之日香天之九月乃鐘礼乃落者雁音文末来鳴云々トミユ。)

(6) 原典ではカタカナ表記であったものが教科書では漢字表記となっている。

・ 読み (ヨミ) 【二五⑤】

・ 神鳴る騒ぎに (神ナルサワギニ) 【二五⑤】

・ 見ゆ (ミユ) 【二六③】

(7) 原典でのカタカナ表記が、教科書では別のカタカナ表記がなされている

・ イカズチ (イカツチ) 【二六⑨】

(8) 原典の記述を教科書本文では省略したり、書き換えたりしている箇所が見られる。

・ 造語と (造語だと) 【二六⑦】

・ 訛言 (訛語) 【二六⑩】

・ 記述ナシ (この頃配給制になってから) 【二七①】

・ サマを (やはりサマを) 【二七⑩】

・ 記述ナシ (トマトの畑からは雫がポタポタ落ちる)

【二八①後】

(9) 送りがなに相違が見られる。

・締め切り(締切)【二二④】

・引き歌(引歌)【二六④】

・少なく(少く)【二七⑩】

(10) 区切り符号に相違が見られる。

・多いようだ。(多いようだ)【二二②】

・「かみなりさま」(かみなりさま)【二三①】

・平安朝にあったことは、(平安朝にあったことは)【二四①】

・多く出ている、(多く出ている)【二四①】

・順当だが、(順当だが)【二四⑥】

・中国・四国の(中国、四国の)【二四⑨】

・青森・秋田の(青森秋田の)【二四⑩】

・中国・四国に残って、(中国、四国に残って)【二四⑫】

・中心とし、その隣接地方、たとえば、(中心としその隣接地方例えは)【二五⑧】

・俚言で、(俚言で)【二五⑨】

・神奈川・群馬・茨城(神奈川、群馬、茨城)【二五⑨】

・「ゆうだつ」(ゆうだつ)【二五⑪】

・鹿島・香取・行方の(鹿島・香取・行方の)【二六④】

・俚言がある。(俚言がある)【二六⑥】

・中国・四国などの(中国、四国などの)【二六⑩】

・俚言には、(俚言には)【二六⑭】

・しながら、(しながら)【二六⑭】

(11) 傍点に相違が見られる。

・めだかやかたつむり(めだかやかたつむり)【二二⑩—⑪】

・伊香保嶺にかみな鳴りそね【二三⑤】

(伊香保嶺にかみな鳴りそね)【※「かみ」傍点は○】

・改行に相違が見られる。【二四⑯】・二五⑯】

・【二六⑬】

五 大意

雷の方言について、「万葉集」「倭名鈔」「新編常陸国誌」等を引用

参照して解説し、さらに当時の日本各地に分布する雷の俚言についても豊富な実例をあげて説明している。

六 文章構成

文章構成は大きく次の四段に分かれる。

俚言に対しての豊富な知識をわかりやすく読者に伝えている。

地図を参照しつつ本文を読むと、さらに効果的であろう。

また、書き出しと結びの呼応も見事である。「雷雨」により「かみなりさま」の俚言というテーマを導き出し、雨がやんだところで文章を閉じている。さらに「つゆもこれあける」と読者に季節を意識させている。

文章構成の妙も学習者に着目させたいところである。

1【二二①—二二⑨】書き出し

随筆を依頼されて弱つているところへ、ちょうど雷雨がやってきた。

それから思いついて雷の俚言について書くことにした。

2【二二⑩—二四③】古典に見る雷の俚言

雷の俚言は、かみなり一色ではないが、東京語ではかみなりさまであろう。これは平安期に行われていたが、それよりも「かみ」の方が古く、万葉にも多く出ている。

3【二四④—二七⑬】日本各地の雷の俚言

俚言カミナリ系は関東一帯に、ナルカミ系は中国・四国に残っている。カミという所は少ない。カンダチ系は関東・南奥州を中心に分布している。そのほかユータチ、シグレ等があるが、以上のものは雷を神と恐れた古人の心理を伝えたことばである。神の観念をもとにしながら雷の轟音をもつて写したものである。近畿方面のハタガミ、瀬戸内その他に広く分布するドロドロ等である。また漢語の雷の字音ライに基づく俚言もある。

4【二八①】むすび

雲がきれて青空が出てきた。つゆも明ける季節である。

注

- 1 『釧路論集』第四十三号 平成二十三年(二〇一一)十二月 一一—一三頁
- 2 『北海道教育大学紀要』(教育科学編)第六十四卷第二号 北海道教育大学 平成二十六年(二〇一四)二月 一一—一五頁
- 3 尚、「()」内の()数字は、「教材」かみなりさま談義考(上)、「教材」かみなりさま談義考(2)の末尾数字をそれぞれ示すものである。

※尚、引用に際し、旧字については、適宜新字に改めた。

※ 本稿は、科研費(23531235)による成果の一部である。

(さのひろみ／北海道教育大学釧路校教授)